

山形県南陽市

稻荷森古墳

— 史跡整備に係る昭和62年度発掘調査概報 —

1988年3月

南陽市教育委員会

序

昭和42年に二町一村が合併し、南陽市が誕生してから、ちょうど20年がたちました。青年南陽市が21世紀に向けて発展をめざすうえで、白竜湖・菊まつり・ぶどうの里といった象徴的な事は、市民のこころの寄りどころとして大切なものでありますが、なかでも、1,600年の時間を超えて、豊かな古代のロマンを語りかけてくれるのが、長岡の稲荷森古墳であります。

全長100m近くあり、東北第6位、県内最大規模、そして東日本の古代史解明上重要な遺跡といわれる本古墳を、どう保存し活用して行くかは、地方の時代・こころの時代と言われる現代に生きる私どもの、大いなる課題であります。郷土の、この誇り高い貴重な文化財を、いかに見つけ、守り、活用して行くかについて、これまで様々な見地から検討を重ねて参りました。

国指定史跡となり、公有地化が完了したいま、来世紀以降も永久に保存して行くに足る状態に保つこと、これには、古墳本来の築造の姿を科学的に正しくとらえつつ整備して行くことが必要であるとの考えが出されました。

今次の学術的発掘調査は、掘ることのみならず、観察し分析し、そして記録するという、実に地道な調査であり、その結果、様々なことが本書に明らかにされました。長岡丘陵の端を切断し、土盛り整形による銚子型の三段築成という本古墳の、築成時の端正な姿を伺い知るとき、私ども南陽の祖先も加わったであろう古代の大土木事業の困難さを想い起さずにはいられません。そして今次調査により整備のための多くの基礎資料が得られましたことは、大きな喜びと考えます。

整備や調査についてご指導をいただいた稲荷森古墳整備事業検討委員会の委員の方々、および、とくに現地指導を賜った大塚初重先生、加藤稔先生、佐藤鎮雄先生、丹羽茂先生、佐藤庄一先生、阿子島功先生には、深甚なる感謝を申しあげます。

また、地元の方々や保存会の方々のこれまでのご努力、並びに茨木光裕先生はじめ調査参加者の皆様にもこころからお礼を申しあげ、ごあいさついたします。

昭和63年3月31日

南陽市教育委員会

教育長 渋谷 幸一

例 言

1. 本書は、国指定史跡「稲荷森古墳」の整備事業を行うにあたり、国庫補助を受けて南陽市教育委員会が実施した、「昭和62年度稲荷森古墳発掘調査」の報告書（概報）である。

2. 発掘調査期間 昭和62年10月16日から同年11月16日まで

3. 調査体制

調査主体 南陽市教育委員会

調査担当 南陽市教育委員会社会教育課
課 長 粟野 忠雄
次 長 渡部 昌久
文化係 係 長 菅野 章
学芸員 吉野 一郎

調査指導 稲荷森古墳整備事業検討委員会 山形県教育庁文化課

調査担当者 調査員 吉野 一郎（南陽市教育委員会学芸員）
調査員 茨木 光裕（日本考古学協会会員）
調査補助員 茂木 孝順（南陽市史考古資料編担当）

4. 稲荷森古墳整備事業検討委員会委員の構成

柏倉 亮吉（山形大学名誉教授）
仲野 浩（山形大学教授）
大塚 初重（明治大学教授）
加藤 稔（山形県立博物館主任学芸員）
佐藤 鎮雄（南陽市立宮内中学校教諭）
丹羽 茂（宮城県多賀城跡調査研究所研究員）
錦 三郎（南陽市文化財保護審議会委員長）
北野 拓（南陽市文化財保護審議委員）
橘 直樹（ 同 上 ）
守谷 俊雄（ 同 上 ）
川合 芳吉（ 同 上 ）

5. 調査協力 調査については、つぎの方々や機関等からご協力をいただきました。あつくお礼を申し上げます。とくに山形大学阿子島功先生には、土層の分析と調査について多大なご協力をいただきました。

山形県立博物館 山形県立赤湯園芸高等学校 南陽市長岡地区
稲荷森古墳保存会 阿子島 功 川崎 利夫 保角 里志

6. 作業参加者

- ・発掘作業 鈴木 茂蔵 渡部 正二 茂出木 博 沼沢 涌初 加藤 英一
篠崎淳一郎 相沢 一雄 寺嶋 六郎 鈴木 茂 鈴木 光子
古山 嘉吉 鈴木ハナ子 高橋 一郎 鈴木シゲ子 富樫 清一
(順不同)
- ・整理作業 牧野 尚美 須貝貴美子
- ・稲荷森古墳地形測量 (昭和60年度) および16m基準杭設置作業 (㈲マエダ測量設計事務所)
- ・立木刈払作業 (昭和62年度) 加藤組 (加藤嘉七)

7. 本報告書の凡例

- ① 本書は概報のため、記載事項については、昭和63年度の調査に関する報告書で補正してゆく。
- ② 本書で使用した遺構の分類記号はつぎのとおりである。
SK……土壌 SD……溝状遺構 SL……炉跡 SP……ピット SX……性格不明遺構
- ③ 挿図中の方位は、磁北をさす。
- ④ 土色表示については、「新版標準土色帳」(小山・竹原編著、農林省農林水産技術会議事務局監修 1976)によった。なお、不均質に混りあった土層については、原則として土色記号を記載しなかった。また、土層Noは、層位順序を示していない。
- ⑤ 本古墳の測量・基準杭等にかかわる標高は、古墳北方のB.M. (H=216.181m) を基としており、これは、南陽市長岡地区所在の一等水準点 (214.7664m) から導いたものである。
- ⑥ 本書は、稲荷森古墳整備事業検討委員会における討議をふまえ、吉野と茨木が協議しつつ共同で執筆作成した。編集は吉野が担当した。

目 次

| | | | |
|---------------|---|------------|----|
| 第1章 立地と環境 | 1 | 1. 4トレンチ | 7 |
| 第2章 調査の経緯 | | 2. Aトレンチ | 7 |
| 1. 調査に至るまでの経過 | 3 | 3. Bトレンチ | 15 |
| 2. 従前の成果の概要 | 4 | 4. Cトレンチ | 15 |
| 3. 今次調査の目的と方法 | 5 | 第4章 まとめと課題 | |
| 4. 調査の経過 | 5 | 1. 調査のまとめ | 21 |
| 第3章 調査の成果 | | 2. 今後の課題 | 22 |

挿図目次

| | | | |
|----------------------|---|------------------|-------|
| 第1図 稲荷森古墳の位置と赤湯地区の古墳 | 1 | 第6図 4トレンチ平面図・層序図 | 9～10 |
| 第2図 稲荷森古墳と周辺の遺跡 | 2 | 第7図 Aトレンチ平面図 | 11～12 |
| 第3図 稲荷森古墳概要図 | 3 | 第8図 Aトレンチ層序図 | 13～14 |
| 第4図 稲荷森古墳実測図(新) | 4 | 第9図 Bトレンチ平面図・層序図 | 16 |
| 第5図 調査区域図 | 6 | 第10図 Cトレンチ平面図 | 17～18 |
| | | 第11図 Cトレンチ層序図 | 19～20 |

写真図版目次

| | |
|---------------------|------------------|
| 図版1 稲荷森古墳全景 | 図版6 Aトレンチ調査状況(2) |
| 図版2 調査地全景・4トレンチ調査状況 | 図版7 Bトレンチ調査状況 |
| 図版3 4トレンチ調査状況(1) | 図版8 Cトレンチ調査状況(1) |
| 図版4 4トレンチ調査状況(2) | 図版9 Cトレンチ調査状況(2) |
| 図版5 Aトレンチ調査状況(1) | 図版10 出土遺物 |

第1章 立地と環境

山形県の最南部を占める米沢盆地は、南北長約24km、北部での東西長約18km、菱形に近い形を呈している。稲荷森古墳は、この盆地の北部、南陽市赤湯地区にあり、所在地は、南陽市長岡字稲荷森1,175他である。JR奥羽本線赤湯駅からは、南東約1.2kmの位置にある。(第1図)。

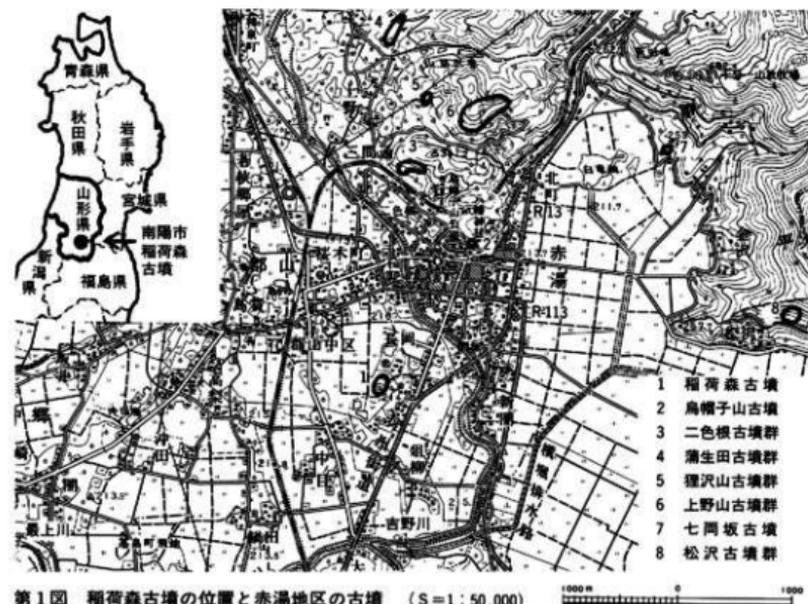
赤湯地区は、盆地北縁の山々、洪積世置賜湖盆の遺存湖である白竜湖大谷地、および沖積低地から成る。白竜湖周辺には、いくつかの低平な洪積台地(孤丘)が点在するが、これらの内の北西部長岡丘陵の一角に、本古墳は立地している。

長岡丘陵は、南北2つに分かれており、いずれも高度は低く、南北に長いが、稲荷森古墳は、山形県立赤湯園芸高等学校敷地のある北部丘陵(長岡山)の南西端部を占めている。

古墳からの眺望は良好で、米沢盆地北半の大部分を一望のもとにおさめることができる。周辺の現況は、果樹園や畑地であるが、以前は雑木林で閑寂とした一帯であったと伝えられている。

赤湯地区は、古来から交通の要の地であり、現在も、奥羽本線や国道13号線が南北に走り、国道113号線が東西に貫く要衝の地である。赤湯温泉の存在とも相俟って、大集落が形成されている。

米沢盆地の北縁の山地から発した吉野川は、市内を南流し、長岡丘陵東部を経て、西方の最上川



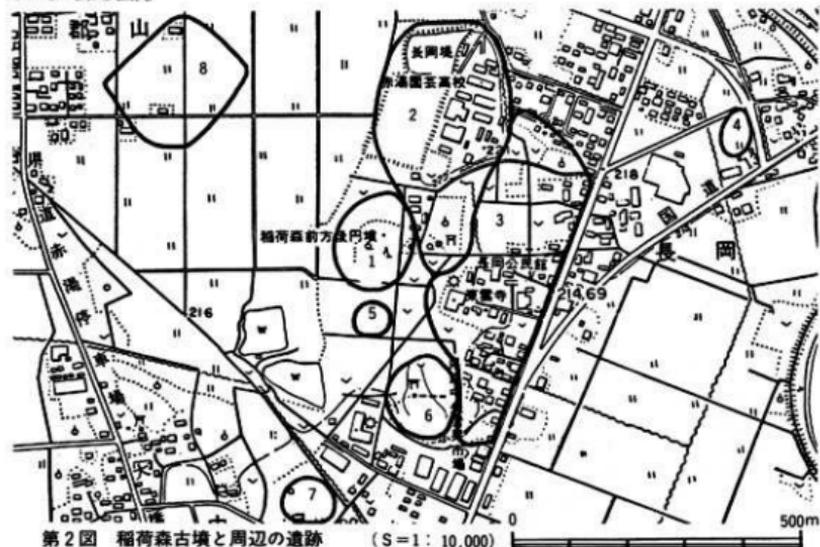
に合流する。吉野川流域の自然堤防や微高地には、縄文時代以降の遺跡が散在している。

市内の古墳時代の遺跡は、現在42にのぼり、この内古墳（群）は13か所確認されている。なかでも赤湯地区には8か所が集中している（第1図）。

古墳時代前期は本古墳，中期としては、蒲生田古墳群の一部，後期の松沢古墳，また、いわゆる終末期のものとしては、烏帽子山・二色根・狸沢山・上野山の各古墳（群）が存在している（注1）。

長岡丘陵の西方一帯は、「郡山」地区であり、さらに北方一帯に存在が推定されている条里制とも関って、古代置賜郡衙所在地と想定されている。

長岡丘陵と周辺地区には、遺跡が濃密に存在し、北部丘陵の本古墳や長岡山遺跡、東側に大規模に広がる長岡山東遺跡、南部丘陵には、長岡南森遺跡が確認されている。とくに、長岡山・長岡南森両遺跡からは、古墳時代前期の遺物が出土していることから、本古墳との密接な関係が予想されている（第2図）。



第2図 稲荷森古墳と周辺の遺跡 (S=1:10,000)

| 番号 | 遺跡名 | 種別 | 立地 | 海拔高度 | 地目 | 時代 |
|----|--------|-----|----|------|--------|--------------------|
| 1 | 稲荷森古墳 | 古墳 | 丘陵 | 226m | 原野 | 古墳(縄文・平安) |
| 2 | 長岡山遺跡 | 集落跡 | 丘陵 | 220m | 学校敷地 | 旧石器・中石器・縄文・古墳・奈良平安 |
| 3 | 長岡山東遺跡 | 散布地 | 平地 | 216m | 宅地・畑 | 縄文・平安 |
| 4 | 太子堂遺跡 | 散布地 | 平地 | 214m | 駐車場 | 平安 |
| 5 | 長岡西田遺跡 | 散布地 | 平地 | 216m | 畑 | 縄文中期 |
| 6 | 長岡南森遺跡 | 散布地 | 丘陵 | 220m | 社地・山林 | 縄文・古墳・平安 |
| 7 | 中ノ目下遺跡 | 散布地 | 平地 | 215m | 水田・果樹園 | 奈良・平安 |
| 8 | 早稲田遺跡 | 散布地 | 平地 | 218m | 水田・宅地 | 奈良 |

第2章 調査の経緯

1. 調査に至るまでの経過

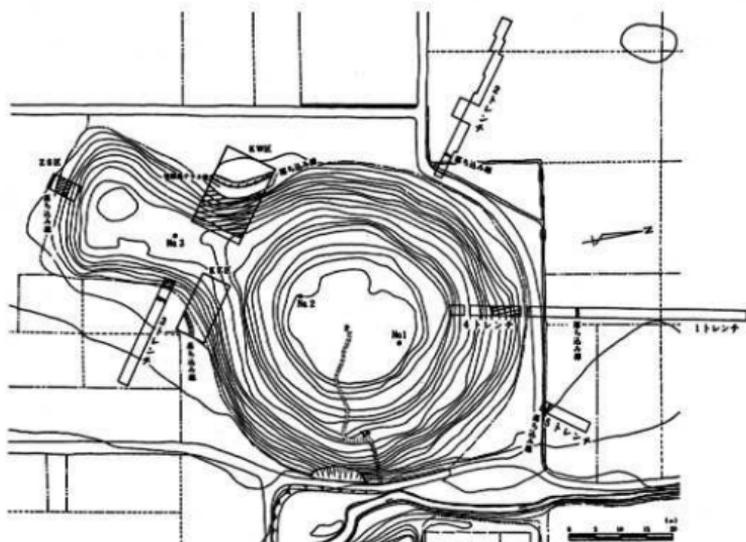
昭和初期に稲荷森古墳が発見されてから諸段階を過ぎて今次調査に至るまで、実に50有余年を経ている。この間、いくつかの貴重な調査とその報告および多くの論文が示され、現在では、東北地方有数の規模を持ち、大型前方後円墳としては日本海側北限であり、東北古代史の解明上重要な古墳であるとの認識を得るに至っている。そして、文化財として本来の理解が得られるようになるまで、佐藤哲太郎・錦三郎・佐藤鎮雄各氏ら地元関係者の大きな力があつたことも記しておかなければならない。

今までの諸調査とその報告、整備関連事項の概略は、つぎのとおりである。

昭和8年(1933)ごろ 新山三郎氏による発見(注2)。

昭和13年(1938) 西村真次氏による報告。「……長岡には成壇を有つた雙子塚らしきものがあり……」(注3)。

昭和36年(1961) 柏倉亮吉氏による調査(出土遺物から、前方後円墳との断定は控えられた)(注4)。

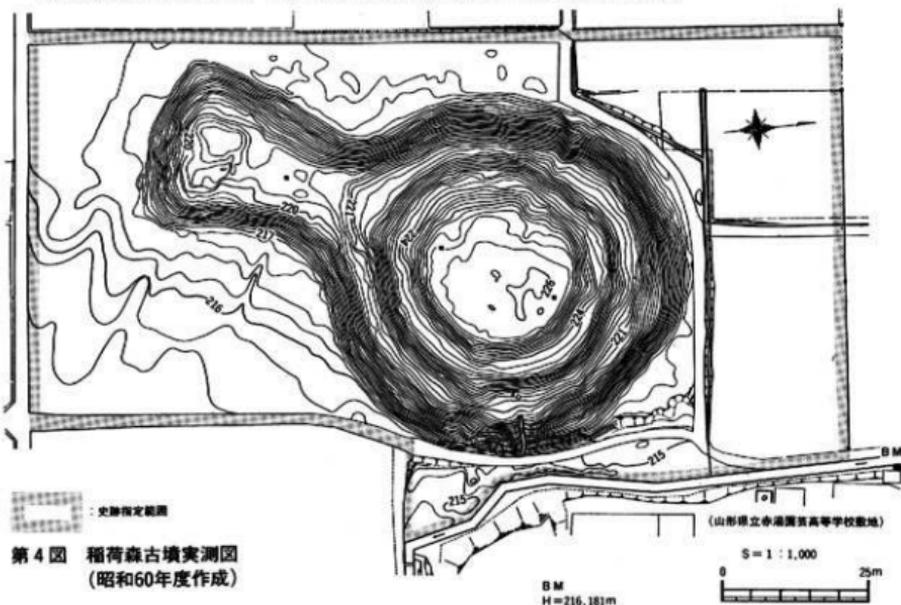


第3図 稲荷森古墳概要図(斜線部分は旧丘陵の利用を確認した部分)
(山形県立博物館「稲荷森古墳調査概報」昭和55年より)

| | |
|--------------|---|
| 昭和43年 (1968) | 赤湯町史における前方後円墳説の提示 (注5)。市指定史跡となる。 |
| 昭和52年 (1977) | 山形県史編さん室・稲荷森古墳調査団等による測量調査の実施。大型前方後円墳との認識が定まる (注6)。 |
| 昭和53年 (1978) | 山形県立博物館による発掘調査 (周濠の有無, 古墳の範囲, 墳丘造成法等の確認が目的 注7) (第3図)。 |
| 昭和54年 (1979) | 山形県立博物館による発掘調査 (墳丘造成法, 造成時期等の確認が目的 注8) (第3図)。 |
| 昭和55年 (1980) | 5月24日付で国指定史跡となる (注9) (第4図)。 |
| 昭和59年 (1984) | 指定地10182.7㎡の内8321.42㎡が市有地となる (公有地化完了)。 |
| 昭和60年 (1985) | 南陽市教育委員会による測量調査 (第4図)。 |
| 昭和62年 (1987) | 南陽市教育委員会による史跡整備関連発掘調査。 |

2. 従前の成果の概要

これまでの諸調査の結果, つぎの点が確認されている。主軸方位は, N-30°-Eであること。平面形は鏡子形を呈し, 断面形は三段築成を示すこと。周濠・葦石・埴輪は発見されなかったこと。周囲にテラス状平地がめぐっていること。築造方法としては, 丘陵南端を切断し, 盛土, 整形していること。年代に係る遺物としては, 後円部から4世紀末埴登式土器が検出されたが, 築造年代は5世紀と考えられること。主体部位置は未確認であること等である (注10)。



第4図 稲荷森古墳実測図
(昭和60年度作成)

3. 今次調査の目的と方法

南陽市教育委員会では、文化財の保護、保存をはかり、南陽市のシンボルのひとつとして積極的活用を計る見地から、山形県教育庁文化課との協議のうえ、本古墳の整備事業について検討し、実施することとした。次のとおりの予定である。

昭和62、63年度は、発掘調査を実施し、この資料等を基に実施設計を行い、昭和64年度以降に整備工事等を実施の予定とする。

整備事業の計画と推進については、「稲荷森古墳整備事業検討委員会」を設け、整備に係る基本方針としては、現状に近いかたちで復元整備することとした。

昭和62年度発掘調査については、上記委員会の検討の結果、つぎの点を主たる目的とした。

- ① 葦石、埴輪の有無の再確認
- ② 墳丘の等高線が乱れている所の成因、および特に段築部分の確認
- ③ 墳麓線、墳麓部分の確認
- ④ 調査対象は、後円部とし、新規に深掘りを行わず、また最少限度の発掘面積とすること。

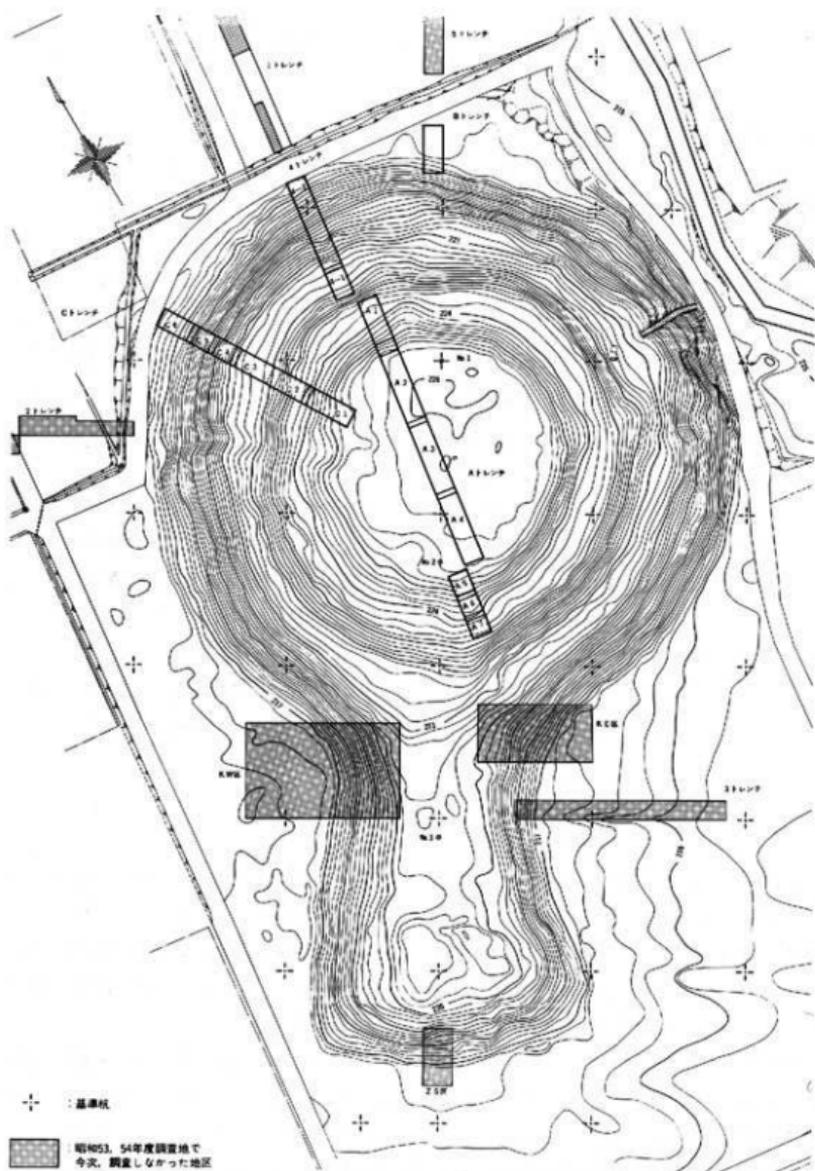
これらの目的のために、従前調査4トレンチを再発掘し、墳丘構造の再検討を行うこと。また4トレンチを後円部南方向に延長し、Aトレンチとして特に墳丘面状況、葦石・埴輪の有無を確認すること。旧5トレンチの延長線上にBトレンチを設け、墳麓部の確認をめざす。後円部北西部において、埴輪・葦石および段築状況と墳丘表土の状況確認のため、Cトレンチを設ける。旧1トレンチを再掘し、周濠に係る状況を再検討すること等を主要目的とした(第5図)。なお、トレンチの幅を2mとし、発掘区の区分と埋戻し後の崩落防止のため、所々ベルトを配することとした。

4. 調査の経過

発掘区設定と墳丘保護の目的で、はじめに墳丘の残根再切除と下刈りを行った。つぎに、今後の発掘調査および整備事業の実施の基礎作業として、基本的に16mを1辺とする大グリッド杭を設置した。これは、昭和53・54年度調査時に墳丘麓線(主軸)上に設置されているNo.1, No.2, No.3基準杭を元とし、No.1杭を基点として設けた。(No.1～No.3のラインは、N-30°-10°-Eを計る。)

- | | |
|---------------|------------------------------------|
| 10月16日 | 調査開始。 |
| 10月17日～11月5日 | 4, A, B, C, 1各トレンチを設置し掘下げ、観察精査を行う。 |
| 11月4日～11月13日 | 各トレンチ平面図、断面図等の作成(1トレンチを除く)。 |
| 11月12日～11月15日 | 崩落防止処理を加えつつ、埋もどし作業を行う。 |
| 11月16日 | 資材搬取、調査終了。 |

なお、調査期間中、稲荷森古墳整備事業検討委員会委員による現地指導と検討が行われた。精査面積は、4, A, B, C各トレンチ合計約166㎡である。



第5図 調査区域図

5-1 米



第3章 調査の成果

1. 第4トレンチ (第6図)

第4トレンチは、昭和53年の調査時に設定したトレンチで、2段目の段築部分から後円部北側の墳麓部に至る調査区である。2段目の段築平坦面の調査区を1区、その北側の墳丘斜面の調査区を2区とする。今回1区では前回未調査の49層以下を地山面まで面的に掘り下げた。前回の調査によって、1区の地山直上から土師器の高坏約1個体分が検出されたと報告されている(注11)。

今回の調査によれば、1区ではトレンチ南端で現墳丘面下約2.4mに、上面がほぼ平坦な地山層(45層)が認められる。地山層直上49層から縄文土器および磨製石斧などがまとまって出土した(図版3.10)。また、径約45cmの浅い地床炉(SL1)や地山面に掘り込まれた柱穴(SP7)などが検出された。調査区が狭いため明確ではないが、当該期の遺構(住居跡等)が存在した可能性がある。土層断面観察では、49層の上位の黒色土層(47層)は旧表土と考えられる。1区の南東コーナーでは、47層を切った状態で掘り込み遺構が確認できた。当該遺構内には、炭化物を多く含む比較的柔らかい土層(46a)がみられ、立ち上り付近の堆積層(46b)には多量の焼土の混入が認められた。また、非常に堅く締った薄層(46層)が認められ、その直上に多量の木炭(55層)が遺存している。SP5、SP6は、木炭層(55層)下に存在しており、この遺構に伴うものと推測される。なお、墳丘盛土は、40層以上であることが確認できる。

2区では、前回の調査深度まで掘り下げて観察した結果、3基の土壌が47層下位に検出されたが、この内のSK7はフラスコ状の断面形態を呈する。旧表土下にあるこれらの遺構は、縄文期の所産と考えられる。

2. Aトレンチ (第7図, 第8図)

Aトレンチは、第4トレンチに隣接する南側の延長線上に設定した調査区で、第4トレンチ側南を1区とし、墳頂部および前方部方向へ順次7区までの小区を設けた。1区は、2段目の段築部平坦面から墳頂肩部にかけて設定した調査区で、墳丘盛土を切って溝、土壌状の遺構が検出された。1区の壁面観察によれば、表土下の第3層は墳頂肩部から段築平坦面の傾斜変換部にみられる締りのわるい土層で、流土的な性格をもつ可能性が考えられる。

墳頂部のトレンチでは、表土直下のかなり浅いところから掘り込む溝および土壌状の遺構が多数検出された。その性格については不明であるが、糸切り無調整の坏、斜位の平行状叩き目をもつ中世陶器片などが出土した。また、遺構にはかなりの切り合いが認められた。墳頂部で検出されたこれらの遺構に伴って比較的浅いレベルより拳大の礫が多く検出されたが、墳丘に伴うような配列を示すものは確認できなかった。

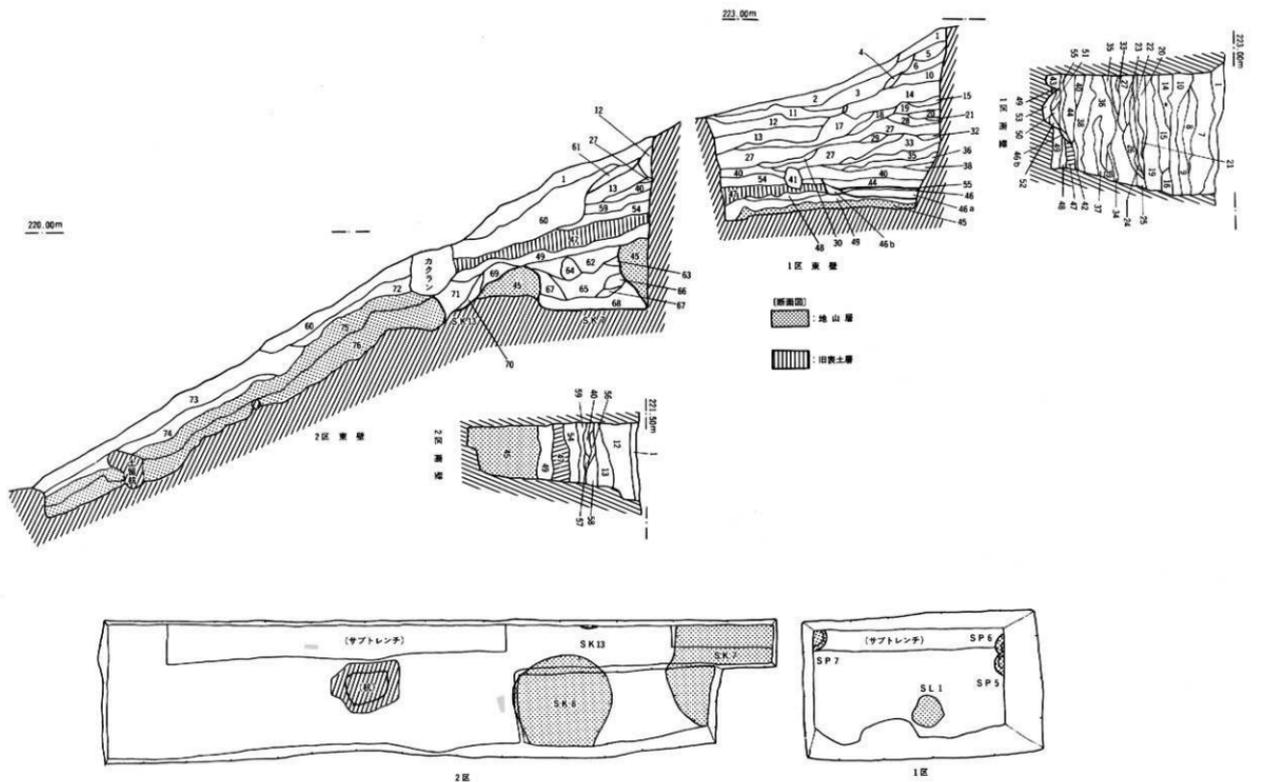
第4トレンチ土層注記説明

| 土層No | 土層名 | 土色記号 | 備 考 | 土層No | 土層名 | 土色記号 | 備 考 |
|------|--------|-------------|--------------------------|------|---------|-----------|----------------------|
| 1 | 表 土 | | | 40 | 明赤褐色土 | 5Y R5/8 | +7.5Y R8/3, 礫層 |
| 2 | 二次堆積土 | | 前回調査時の掘り土 | 41 | カク 乱 | | 樹根により乱れている, 礫状 |
| 3 | 暗赤褐色土 | 2.5Y R4/3 | | 42 | 黒 色 土 | | 茶褐色土約30%含む |
| 4 | " | 5Y R3/2 | | 43 | 黒 褐色 土 | | 黒色土がしま状に混入 SP5層土 |
| 5 | 褐色土 | 7.5Y R4/3 | | 44 | 暗 褐色 土 | 7.5Y R3/2 | 黒色土を多く含む 住居跡状遺構層土 |
| 6 | 黒褐色土 | 5Y R3/1 | | 45 | 明赤褐色土 | 5Y R5/6 | 地山, 粘土 |
| 7 | 褐色土 | 7.5Y R6/6 | 礫まじり | 46a | 極暗褐色土 | 7.5Y R2/3 | 住居跡状遺構掘り方埋土 |
| 8 | 明褐色土 | 7.5Y R5/8 | 偽礫ふくむ | 46b | " | | 多量の焼土を含む |
| 9 | 明赤褐色土 | 2.5Y R5/8 | 砂質粘土, 礫まじり | 46 | 赤褐色粘質土 | | しまって硬い, 粘床 |
| 10 | 褐色土 | 5Y R6/6 | " | 47 | 黒 色 土 | 7.5Y R2/1 | 炭化物含む, 砂質粘土, 旧表土 |
| 11 | 赤褐色土 | 5Y R6/8 | | 48 | 暗赤褐色土 | 5Y R3/4 | かたく粘質あり, 砂質粘土 |
| 12 | " | | 11層土に白色土小ブロックを含む | 49 | 暗 褐色 土 | 10Y R2/3 | 砂質粘土 |
| 13 | 褐色土 | 5Y R7/6 | 白色土ブロックを含む | 50 | 黒 褐色 土 | 10Y R2/3 | 地山土を約50%含む |
| 14 | 黒 色 土 | 7.5Y R2/1 | | 51 | " | | 極暗褐色土を含む |
| 15 | 黒 褐色 土 | 7.5Y R2/2 | 黒色土ブロックを多く含む | 52 | " | | 極暗褐色土を多く含む |
| 16 | 黒 色 土 | 7.5Y R1.7/1 | 地山土の粒子を含む | 53 | 極暗褐色土 | 7.5Y R2/3 | |
| 17 | " | 7.5Y R2/1 | 茶褐色土混入 | 54 | 黒 色 土 | 5Y R1.7/1 | 茶褐色土をブロック状に含む |
| 18 | 褐色土 | 7.5Y R4/3 | 茶褐色土を含み 10Y R8/6の土混入 | 55 | 木 炭 層 | | 粘床(46層)上面の多量の木炭層 |
| 19 | 黒 色 土 | 7.5Y R2/2 | 暗褐色土レンズに含む | 56 | 黒 色 土 | | |
| 20 | 黒 褐色 土 | 7.5Y R2/2 | 黒色土混入 | 57 | " | | 地山土の粒子を多く含む |
| 21 | 黒 色 土 | 7.5Y R2/1 | 茶褐色土を均一に含む | 58 | 赤 褐色 土 | | |
| 22 | " | | 茶褐色土をブロック状に含む | 59 | 黒 色 土 | 5Y R1.7/1 | 地山土ブロックを多く含む |
| 23 | 黒 褐色 土 | | 黒色土若干混入 | 60 | 暗赤褐色土 | 5Y R3/2 | 砂質粘土 |
| 24 | " | 10Y R2/3 | 黒色土約30%混入 | 61 | " | 5Y R3/4 | |
| 25 | " | 10Y R2/2 | 黄褐色粘土レンズを含む | 62 | 灰 褐色 土 | 5Y R4/2 | |
| 26 | " | 7.5Y R2/2 | | 63 | " | | 地山ブロック含む |
| 27 | 黒 色 土 | 7.5Y R2/1 | 茶褐色土ブロック混入 | 64 | 褐色土 | | " |
| 27' | " | " | 茶褐色土ブロック混入 (27層より少ない) | 65 | 黒 褐色 土 | 7.5Y R2/2 | |
| 28 | " | " | 茶褐色土ブロック少量混入 | 66 | " | " | 地山ブロックを多く含む |
| 29 | 暗 褐色 土 | 10Y R3/3 | 褐色土約50%混入 | 67 | 黒 褐色 土 | 5Y R2/2 | |
| 30 | 黒 褐色 土 | 7.5Y R3/4 | | 68 | 赤 黒 色 土 | 2.5Y R2/1 | 礫砂まじり粘土 |
| 31 | " | | 黒色土約50%混入 | 69 | 黒 褐色 土 | 5Y R3/1 | |
| 32 | 黒 色 土 | 7.5Y R2/1 | 黒色土若干含む | 70 | 極暗赤褐色土 | 5Y R2/3 | |
| 33 | " | " | 褐色土を均一に含む | 71 | 暗 褐色 土 | 7.5Y R3/4 | |
| 34 | " | 10Y R2/2 | 褐色土, 地山土を均一に含む | 72 | " | 7.5Y R3/3 | フカフカし, しまり悪い |
| 35 | 褐色土 | 10Y R4/6 | 黒色土を若干, 地山土を多量に含む | 73 | 暗赤褐色土 | 5Y R3/3 | 粘土 |
| 36 | " | | 黒色土, 地山土を均一に含む | 74 | 黒 色 土 | 5Y R4/6 | 地山土ブロックを含み, しまり悪い |
| 37 | 黒 色 土 | 10Y R2/1 | | 75 | 明赤褐色土 | 2.5Y R5/8 | 白色粘土ブロックを含む 地山 |
| 38 | 褐色土 | 5Y R6/8 | 黒色土をまだらに含む, 礫層 | 76 | 褐色土 | 2.5Y R6/8 | しまってかたい, 地山 |
| 39 | 黒 色 土 | 10Y R2/1 | 茶褐色土をブロック状に含む | | | | |

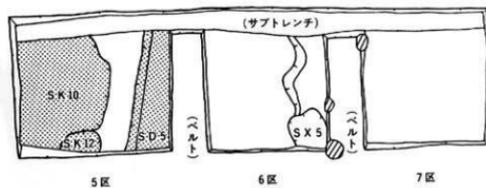
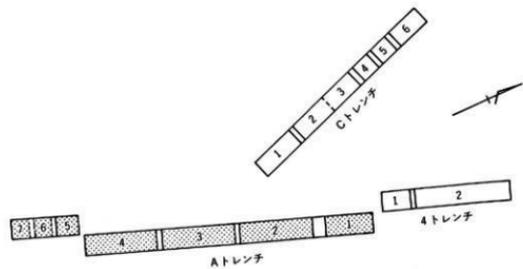
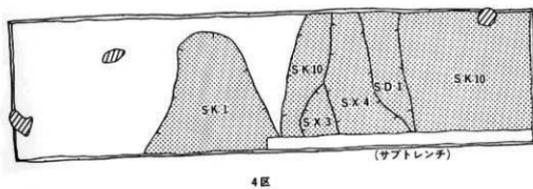
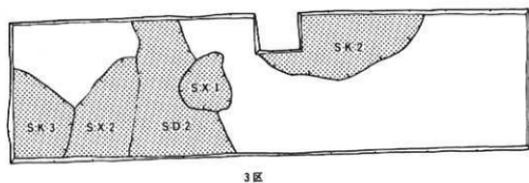
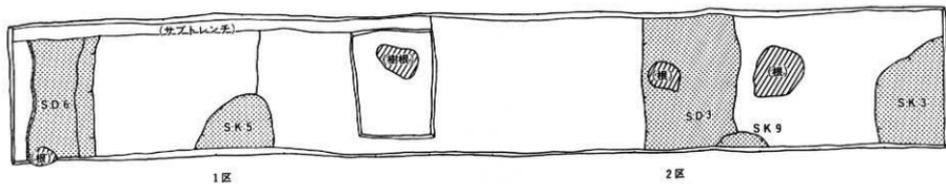
SK6の覆土

SK7の覆土

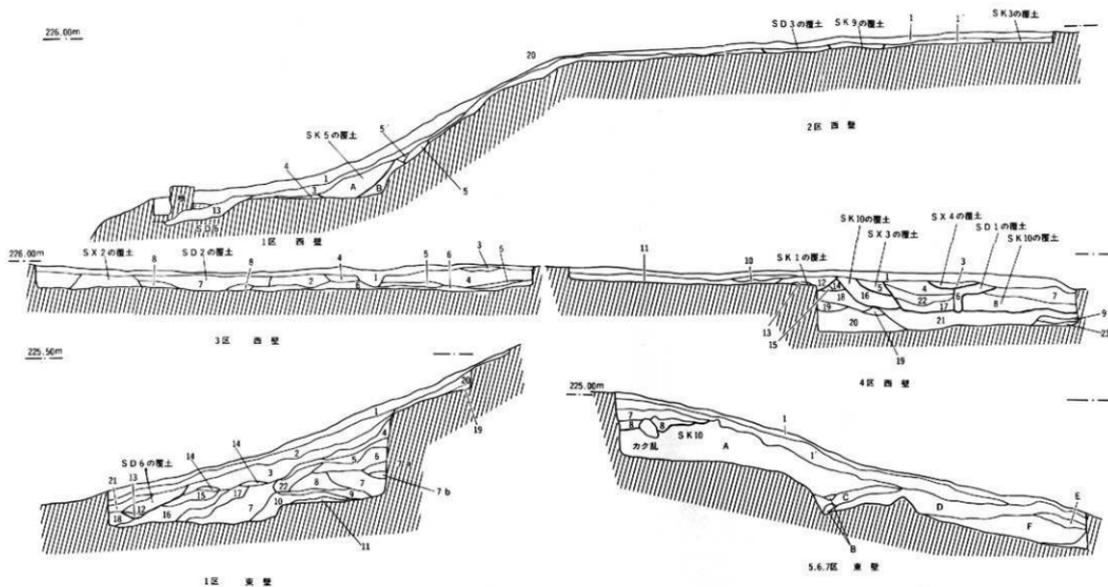
SK13の覆土



第6図 4 トレンチ平面図・層序図



第7図 Aトレンチ平面図



Aトレンチ 土層説明

| 土層No | 土層名 | 土色記号 | 備 考 |
|------|--------|----------|------------------------------|
| 1 | 表 土 | | 1は観察の侵入なし |
| 2 | 暗 褐色 土 | 7.5YR3/2 | |
| 3 | 暗 色 土 | 7.5YR4/4 | |
| 4 | 赤 褐色 土 | 5YR4/6 | |
| 5 | 暗赤褐色 土 | 5YR3/2 | |
| 6 | 黒 褐色 土 | 5YR2/1 | |
| 7 | 黒 色 土 | 5YR1/1 | 7a 8層 砂子を含む 7b 8層 ブロックを含む |
| 8 | 明赤褐色 土 | 2.5YR5/8 | 黒色土の小ブロック混入 |
| 9 | 黒 色 土 | | 黒色土に8層小ブロック含む |
| 10 | 赤 褐色 土 | | 赤褐色土に黒色土を含む |
| 11 | | | 16層より出入度少ない |
| 12 | 暗赤褐色 土 | 5YR2/3 | SD 6の覆土 |

| | | | | | | | | | | |
|----|--------|----------|-------------|------|--------|----------|--------------|-------|--------|----------|
| 13 | 暗赤褐色 土 | 5YR2/4 | SD 5の覆土 | 5' | 黒 色 土 | | 褐色土ブロックを多く含む | 14 | 黒 褐色 土 | 10YR2/3 |
| 14 | 暗 色 土 | 7.5YR4/5 | 3層に暗色土砂子を含む | 6 | 暗 褐色 土 | | | 15 | 暗 褐色 土 | 10YR3/4 |
| 15 | 明赤褐色 土 | 7.5YR5/5 | | 7 | 暗 褐色 土 | | | 16 | 黒 褐色 土 | 10YR2/2 |
| 16 | 明赤褐色 土 | 5YR5/5 | | 8 | 黒 色 土 | | | 17 | # | 5YR2/2 |
| 17 | 暗 褐色 土 | | 黄褐色土に黒色土を含む | 4・5区 | | | | 18 | # | 10YR3/2 |
| 18 | 黒 色 土 | | 赤褐色土ブロックを含む | 1 | 表 土 | | | 19 | 赤 褐色 土 | 10YR5/5 |
| 19 | 明赤褐色 土 | 5YR5/5 | | 2 | 暗 褐色 土 | | | 20 | 黒 褐色 土 | 10YR3/1 |
| 20 | 暗 褐色 土 | 7.5YR2/3 | 15層の風化土 | 3 | 黒 褐色 土 | 5YR3/1 | | 21 | # | 7.5YR3/2 |
| 21 | 暗 色 土 | 7.5YR4/5 | | 4 | 暗赤褐色 土 | 5YR3/2 | | 22 | # | 5YR2/1 |
| 22 | 赤 褐色 土 | 10 R 2/1 | | 5 | 暗 褐色 土 | 5YR2/2 | | 23 | 灰褐色粘質土 | |
| 23 | 明赤褐色 土 | 5YR3/2 | SK 5の覆土 | 6 | 黒 色 土 | 7.5YR2/1 | | 5区~7区 | | |
| # | # | 5YR3/2 | | 7 | 黒 褐色 土 | 5YR2/2 | | A | 暗 色 土 | |
| 3区 | | | | 8 | # | 7.5YR2/2 | | B | 暗 褐色 土 | |
| 1 | 表 土 | | | 9 | # | 5YR3/1 | | C | 暗 色 土 | |
| 2 | 暗 褐色 土 | | 観察の侵入なし | 10 | # | 10YR2/2 | | D | 暗 褐色 土 | |
| 3 | 赤 褐色 土 | | 減少層を含む | 11 | 暗 色 土 | 7.5YR3/2 | | E | 暗赤褐色 土 | |
| 4 | 黒 色 土 | | | 12 | # | 7.5YR4/4 | | F | 明赤褐色 土 | |
| 5 | # | | 褐色土ブロックを含む | 13 | # | 7.5YR4/6 | | | | |

[注: A1区, 2区, 3区, 4区西壁については, 東方から観察し記録したものを反転し, 西方から見た図として記載した]



第8図 Aトレンチ層序図

3. Bトレンチ (第9図)

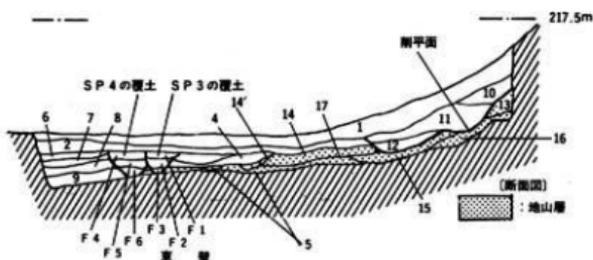
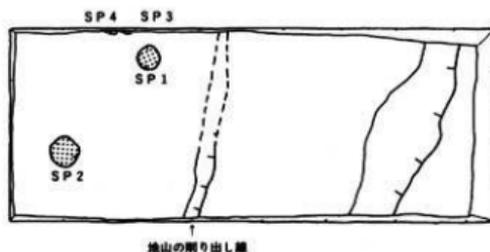
後円部の北東墳麓部は、東側より一段高い舌状の張り出しが認められる。当該部墳麓線の現状は、周囲の後円部墳麓線の状況からすると、墳丘内にくい込んだほぼ直線的な様相を呈する。Bトレンチは、昭和53年の調査時に設定した5トレンチの墳麓部側の、一部墳丘にかかる5×2mの調査区である。この調査区では、現墳丘の墳麓線付近に地山層におよぶ土取り状の削平面が検出された。削平された地山面には、不規則な凸凹があり、現況の墳麓線に対応して35cmほどの段落が認められる。この削平面の上面に黒褐色を呈する締まりの悪い柔らかな土層(11層)が堆積している。

また、現在の墳麓線から約2m北方に、明褐色を呈する堅い地山層が落ち込む段落が検出されたが、トレンチ壁の土層観察によれば、地山層の落ち込んだ上面に極暗褐色を呈するやや粘質な土層(4層)の堆積が認められた。調査区東側では、深掘りのため平面的には把握できなかったが、西側では約15cmの段差が認められ、地山を削り出し、そこの変換部に極暗褐色土層が堆積したものと理解できる。この地山の削り出し線の北側では、径25cm程の円形の柱穴状落ち込みが検出された。東壁ぎわのSP3およびSP4は、表土直下の2層の下位より掘り込んでおり、比較的新しい時期の所産と推定できる。この調査区からの特徴的な出土遺物は特に認められなかった。

4. Cトレンチ (第10図 第11図)

Cトレンチは、墳頂肩部から墳麓部にかけて設定した調査区で、墳頂部側を1区とし、墳麓部へむけて順次6区までの小区を設けた。墳頂肩部の1区では、溝状遺構(SD4)や土壇状の掘り込み(SK11)が検出された。これらは、表土直下の2層より墳丘盛土層を掘り込んでおり、古墳築造後の遺構と考えられる。また、2区では明瞭な平坦面(15, 16', 16層上面)が認められたが、これは2段目の段築部分に対応するところである。平坦面の幅は、約2.2mである。この平坦面の縁辺に接して、3区から4区にわたる大きな掘り込みと考えられる落ち込み(SX6)が検出された。墳丘盛土層は、原則的には黒色土および赤褐色土からなる互層状の水平な堆積状況を示すが、3区・4区に検出されたSX6では、掘り込み面にそって暗褐色を呈する柔らかい土層が堆積しており、不整合的な堆積状況を示している。墳丘の盛土層を切って掘り込まれており、その性格は不明であるが、古墳築造後のものと考えられる。また4区の28層下位は、赤褐色を呈する地山層となり、5区以降の墳丘部は表土直下が地山層であり、これを削り出して造成していることが確認できる。

墳麓部は、現在東西にはしる農道に隣接しているが、35層および36層は農道の路盤層であり、34層は、側溝内に堆積したものである。墳麓部では、地山の削り出しによる段落が検出された。段差は約25cmである。この段落における傾斜の変換部に暗灰褐色の粘質土の堆積が認められた。33層は、地山直上に堆積しており、これが道路の側溝内堆積層によって切られている状況にある。6区で検出された地山の段落が、墳麓線を確定する可能性がある。

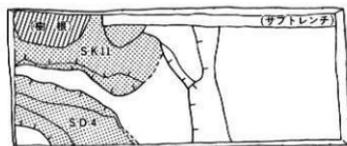


Bトレンチ 土層説明

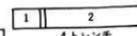
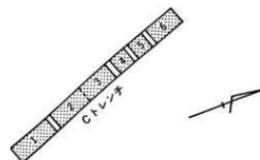
| 土層No. | 土層名 | 土色記号 | 摘 要 | 土層No. | 土層名 | 土色記号 | 摘 要 | |
|-------|-------------|-----------|-------------------------|-------|-------------|-----------|---------|------------|
| 1 | 表 土 | | | 13 | 橙 色 土 | 7.5Y R6/6 | 地山 | |
| 2 | 橘 色 土 | 7.5Y R4/6 | | 14 | 明 橘 色 土 | 7.5Y R6/8 | 地山 | |
| 3 | 暗 橘 色 土 | 7.5Y R3/4 | | 14' | 橘 色 土 | | 地山 | |
| 4 | 極 暗 橘 色 土 | 7.5Y R2/3 | 地山の小ブロックを含む | 15 | 橙 色 土 | 7.5Y R6/8 | 地山 | |
| 5 | 橘 色 土 | 7.5Y R4/6 | | 16 | 明 茶 橘 色 土 | 10Y R6/6 | 地山 | |
| 6 | 極 暗 赤 橘 色 土 | 2.5Y R2/3 | | 17 | 灰 白 色 土 | 7.5Y R8/2 | 地山 | |
| 7 | 暗 赤 橘 色 土 | 2.5Y R3/4 | | F1 | 黒 橘 色 土 | 5Y R3/1 | } SP3覆土 | |
| 8 | 暗 赤 灰 色 土 | 2.5Y R3/1 | | F2 | 極 暗 橘 色 土 | 5Y R2/3 | | } 地山の粒子を含む |
| 9 | 赤 灰 色 土 | 2.5Y R4/2 | | F3 | 暗 橘 色 土 | 5Y R2/3 | | |
| 10 | 黒 橘 色 土 | 7.5Y R3/2 | 地山のブロックを含む | F4 | 黒 橘 色 土 | 5Y R2/2 | } SP4覆土 | |
| 11 | 黒 橘 色 土 | 7.5Y R3/2 | 地山ブロックの混入なし | F5 | 極 暗 赤 橘 色 土 | 5Y R2/3 | | |
| 12 | 橘 色 土 | 10Y R4/6 | 10, 11, 12層は填丘削平による再堆積土 | F6 | 暗 赤 橘 色 土 | 5Y R3/3 | | |

第9図 Bトレンチ平面図・層序図

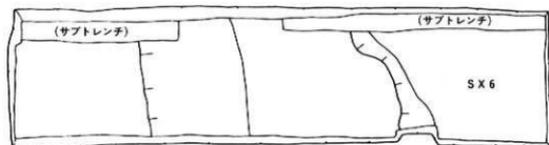




1区



Aトレンチ

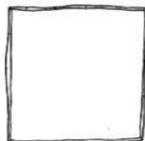


2区

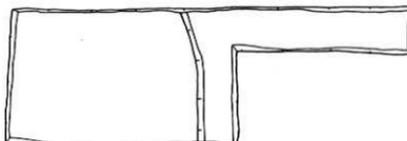
3区



4区



5区

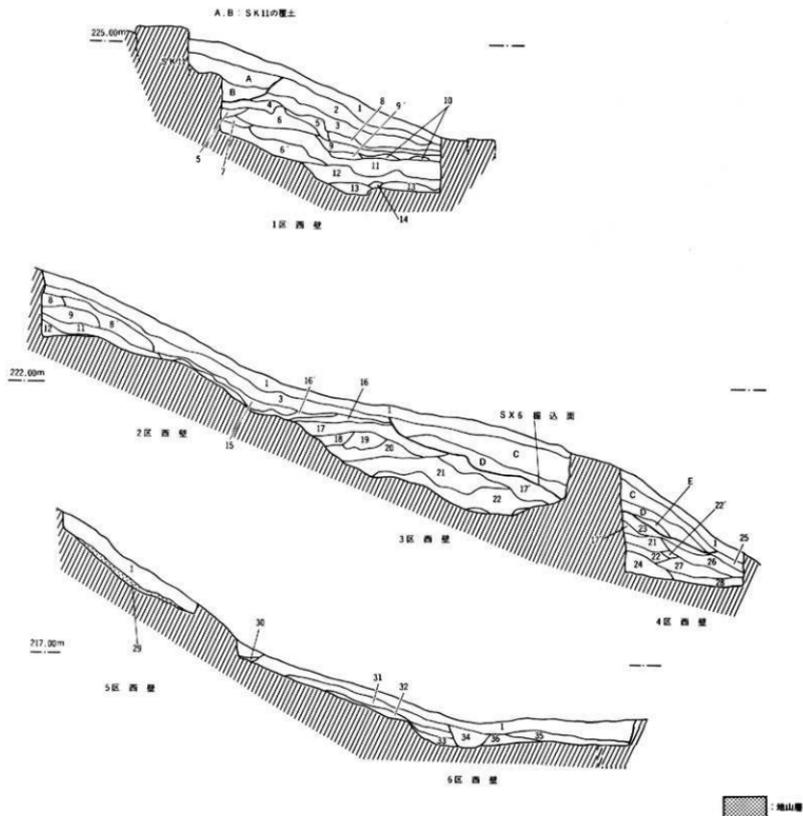


6区

崩り出しによる
段差



第10図 Cトレンチ平面図



Cトレンチ 土層説明

| 土層No | 土層名 | 土色記号 | 備 考 |
|------|--------|-----------|------------------------|
| A | 礫層の黒色土 | 2.5Y R2/2 | 砂 (SK11壁止) |
| B | 暗赤褐色土 | 5Y R3/2 | 粘質砂 (SK11壁止) |
| C | 暗褐色土 | 7.5Y R3/3 | 砂 (5X6壁止) |
| D | # | 2.5Y R3/2 | 粘質砂 (5X6壁止) |
| E | 暗赤褐色土 | 7.5 Y 3/2 | 軽い砂 (赤土層干害) |
| 2 | 暗赤褐色土 | 2.5Y R3/2 | 粘性ある砂 |
| 3 | 黒褐色土 | 5Y R2/2 | # |
| 4 | 黒褐色土 | 5Y R3/1 | # |
| 5 | 礫層の黒色土 | 5Y R2/3 | 地山赤土が小ブロック状に露 |
| 6 | 褐色土 | 7.5Y R4/6 | 砂 |
| 7 | 礫層の黒色土 | 5Y R2/4 | 5層に似る |
| 8 | # | 10 R 2/3 | 砂 |
| 9 | # | 10 R 2/2 | 砂, 8層に似る |
| 10 | # | 10 R 2/3 | 砂 |
| 11 | 黒褐色土 | 7.5Y R3/2 | 砂 赤土干害全 |
| 12 | 赤黒土 | 7.5 Y R/1 | 粘質砂 (暗赤土に似る) |
| 13 | 赤黒土 | 10 R 2/1 | 砂 (黒色土+地山赤土) |
| 14 | 暗赤褐色土 | 5Y R3/3 | 砂 (同上) |
| 15 | 暗赤褐色土 | 5Y R3/6 | 粘質砂 (同上) |
| 16 | 赤褐色土 | 5Y R4/8 | 粘質砂 (地山赤土に同今黒土層) |
| 17 | 暗赤褐色土 | 10 R 3/2 | やや粘質ある砂 |
| 18 | 褐色土 | 7.5Y R4/4 | 砂 (赤土+黒土) |
| 19 | 礫層の黒色土 | 7.5 Y 2/3 | 砂 (#) |
| 20 | 赤黒土 | 2.5Y R2/1 | 粘質砂 (暗赤土に似る) |
| 21 | 黒褐色土 | 5Y R3/1 | 粘性やや有る砂 (赤土層) |
| 22 | 暗赤褐色土 | 2.5Y R3/8 | 粘質砂 (赤土, 黒土がブロック状にまじる) |
| 23 | # | 2.5Y R3/2 | # (赤土層干害) |
| 24 | 黒褐色土 | 5Y R2/1 | # (#) |
| 25 | 暗赤褐色土 | 5Y R3/4 | # (赤土+黒土) |
| 26 | 礫層の黒色土 | 5Y R2/3 | # (2層に似る) |
| 27 | # | 5Y R2/4 | # (#) |
| 28 | 赤褐色土 | 5Y R4/8 | # (黒土層干害) |
| 29 | # | 2.5Y R4/8 | シルト (赤土小ブロック露) |
| 30 | # | 2.5Y R4/6 | シルト (#) |
| 31 | 暗褐色土 | 7.5Y R5/8 | 粘質砂 (小礫露) |
| 32 | 暗赤褐色土 | 5Y R5/6 | # (#) |
| 33 | 灰褐色土 | 7.5Y R4/2 | # (赤土をまだらに露) |
| 34 | 褐色土 | 7.5Y R4/4 | # |
| 35 | 暗赤褐色土 | 7.5Y R2/2 | 粘質土 |
| 36 | 暗赤褐色土 | 7.5Y R4/2 | |

第11図 Cトレンチ層序図

第4章 まとめと課題

1. 調査のまとめ

- (1) 埴輪については、これまでと同様今回も確認されなかった。
- (2) 葦石についても、検出されなかった。墳頂部の遺構に伴う、浅いレベルから検出された礫は、葦石とは認められない。

- (3) Cトレンチ他の状況から、墳丘については、大規模に改変された痕跡は見られなかった。しかし、所々土壌や溝状遺構、性格不明遺構等により小規模かつ部分的な乱れは認められた。

段築については、Cトレンチ2区で、幅2.2mの平坦面が検出され、これは第2段目に対応するものである。また、Aトレンチ1区での所見では、第3層は流土的であって、版築土とは明確にとらえきれず、この性格については今後の検討を要する。

CトレンチSX6におけるC、D層は、明らかに版築土として認定できるものではない。掘り込み面にそって流れ込んだ二次的堆積土とも考えられるが、このSX6付近のごとく、何らかのかたちで墳丘が改変を受けているような形跡が認められるようであっても、墳形の平面形態に特に異変が認められぬ部分の解明は、今後の課題である。

いずれにしても、巨視的に見れば、現在の墳丘状態や段築のあり様は、概ね原形を反映していると考えられる。

- (4) Bトレンチ墳頂部の所見では、削平の痕跡らしき状態が見られることから、Bトレンチ付近では、土取り等、後世の改変が考えられる。
- (5) Bトレンチ、Cトレンチ両墳頂部において検出された削り出し状の地山の落ち込みについては、各々同様の性格をもって対応するものと推定されるが、これらの削り出し部分が、築造時の墳麓線を確定するものかどうかについては、今後の調査の検討を待たねばならない。
- (6) 4トレンチ1区では、調査区が狭く、また再発掘のため土層断面観察のみによる所見であるが、旧表土47層を切る掘り込み状遺構と思われるものが確認された。この内46層は貼床、この直上の55層は木炭薄層である。44層は覆土と考えられるが、54層との関係については、なお検討を要する。また、SP5・SP6は、南壁では55層下に掘り込まれていることから、当遺構に伴うものとおもわれる。したがって、この掘り込み状遺構はおそらく住居跡と考えられ、本古墳築造前の所産であるといえる。

昭和53年の調査で検出された高坏は、当時の調査資料の再検討により、当該遺構に伴って出土した可能性が極めて高い。

- (7) 今次調査の出土遺物については、古墳築造時に係るものは検出されなかった。多くは、平安時代から中世にかけてのものであるが、4トレンチ1区49層出土の遺物は、縄文中期のものと

みなされる。

2. 今後の課題

今次調査は、後円部の一部分を対象として実施したが、今後の課題は上記の諸点に加え、後世に大きく改変された所や整備工事予定地および古墳周囲をめぐるテラス帯と周濠に係る問題点も検討していかなければならない。

また、前方部においては、とくに南端部墳丘形状についても、検討が必要である。

昭和63年度も今年度に引続き確認調査を実施して、来るべき史跡整備の資料を得るために、これらの課題を検討して行く必要があると思われる。

[注]

- 注1 佐藤 鎮雄他 昭和62年(1987) 『南陽市史考古資料編』南陽市史編さん委員会
- 注2 錦 三郎 昭和43年(1967) 『遺跡遺物を中心とした赤湯町の古い文化』『赤湯町史』
赤湯町史編さん委員会
- 注3 西村 真次 昭和13年(1938) 『置賜盆地の古代文化——特に赤湯古墳群に就て——』
『東置賜郡史』上巻 東置賜郡教育会
- 注4 東海林繁子 昭和37年(1962) 『赤湯町大字長岡狐山遺跡調査小報』『歴研月報』特集号
3 山形大学教育学部歴史学研究会
- 注5 注2に同じ
- 注6 佐藤 鎮雄 昭和52年(1977) 『南陽市稲荷森古墳の測量調査』山形考古学会第10回研
究会発表要旨 山形考古学会
- 注7 山形県立博物館 昭和54年(1979) 『稲荷森古墳 昭和53年度調査概報』
- 注8 山形県立博物館 昭和55年(1980) 『稲荷森古墳 昭和54年度調査概報』
- 注9 佐藤 鎮雄 昭和55年(1980) 『山形県南陽市稲荷森古墳の概要』南陽市教育委員会
- 注10 注7, 8, 9の文献より
- 注11 注7に同じ
- 参考文献
- 大塚 初重 昭和61年(1986) 『東日本における古墳文化の成立と展開——とくに福島・宮城・
山形県を中心として』『駿台史学』67 明治大学
- 加藤 稔 昭和55年(1980) 『最上川流域での大型古墳出現の意義(上)』『羽陽文化』109 山
形県文化財保護協会

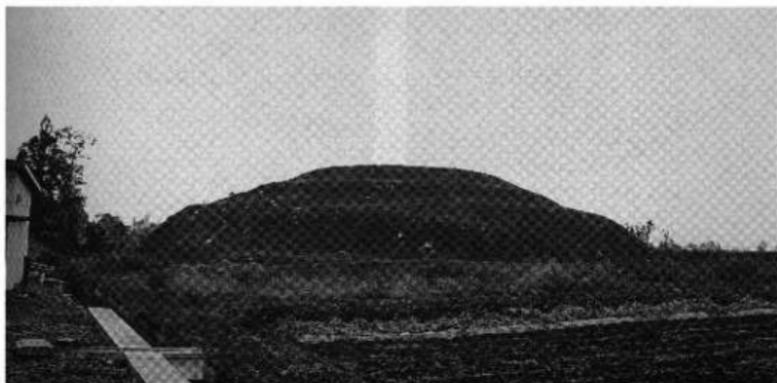
写 真 图 版



1 稲荷森古墳全景（西から）[浜田俊二氏提供]



2 稲荷森古墳全景（東から）



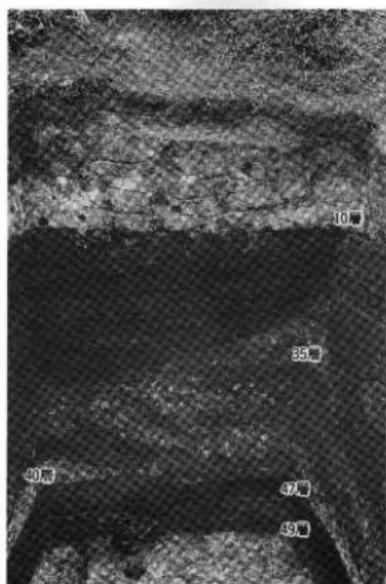
3 稲荷森古墳後円部調査前状況（北東から）



1 調査地全景 (北西から)



2 4トレンチ1区, 2区
Aトレンチ1区全景 (北方から)



3 4トレンチ1区南壁土層断面 (北から)



1 4トレンチ1区東壁土層断面(西から)



2 4トレンチ1区49層
遺物出土状況(北から)

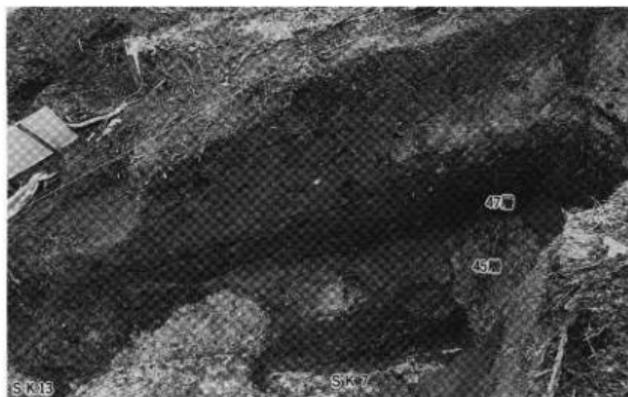


3 4トレンチ2区全景(南から)

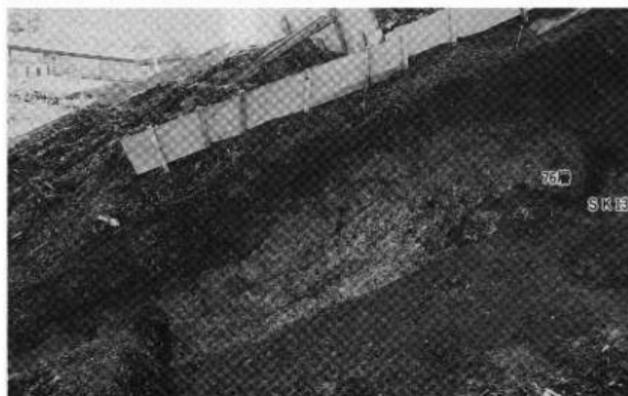
1
4 トレンチ 2
区全景
(北西から)



2
4 トレンチ 2
区全景
(北西から)



3
4 トレンチ 2
区東壁土層断面
(西から)



図版 4 4 トレンチ(2)



1 Aトレンチ1区全景 (西から)



2 Aトレンチ1区全景 (北から)



3 Aトレンチ2, 3区全景 (南から)

1
Aトレンチ3
区全景
(南から)



2
Aトレンチ
5, 6, 7区
全景
(北から)



3
Aトレンチ
5, 6, 7区
全景
(西から)

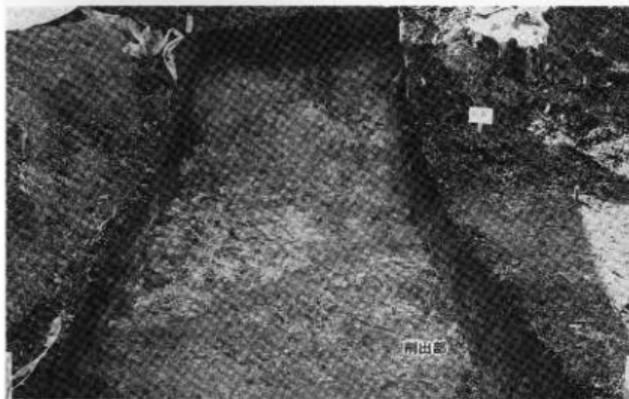


図版6 Aトレンチ(2)

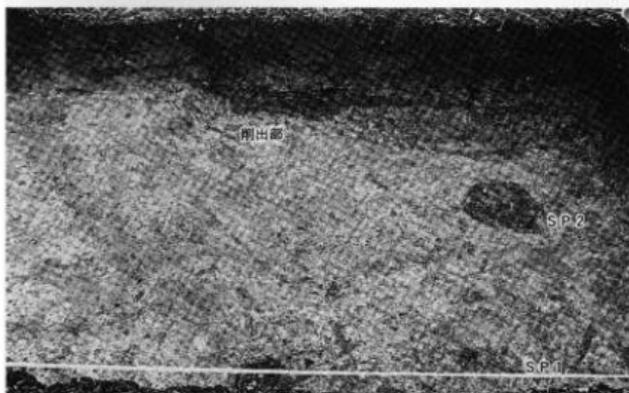
1
B
景
トレンチ全
(西から)



2
B
景
トレンチ全
(北から)



3
B
構
トレンチ遺
(東から)



1
Cトレンチ全景
(北西から)



2
Cトレンチ1
区全景
(南東から)



3
Cトレンチ2
~3区全景
(北西から)



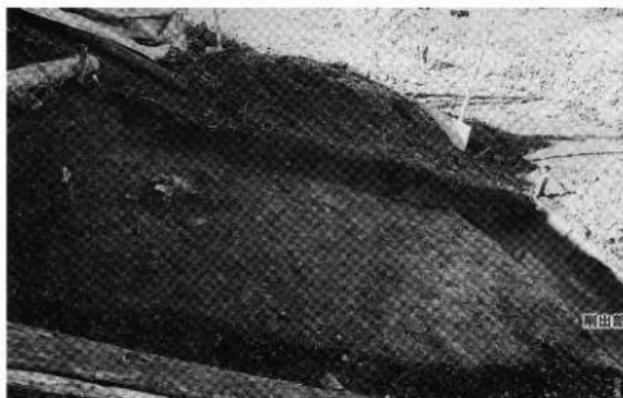
1
Cトレンチ4
区全景
(東から)

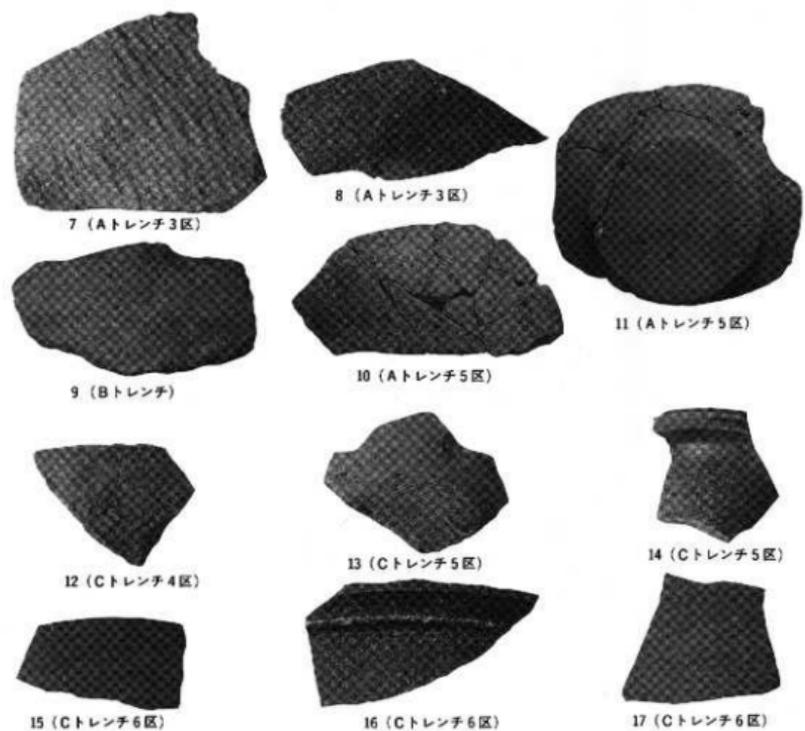
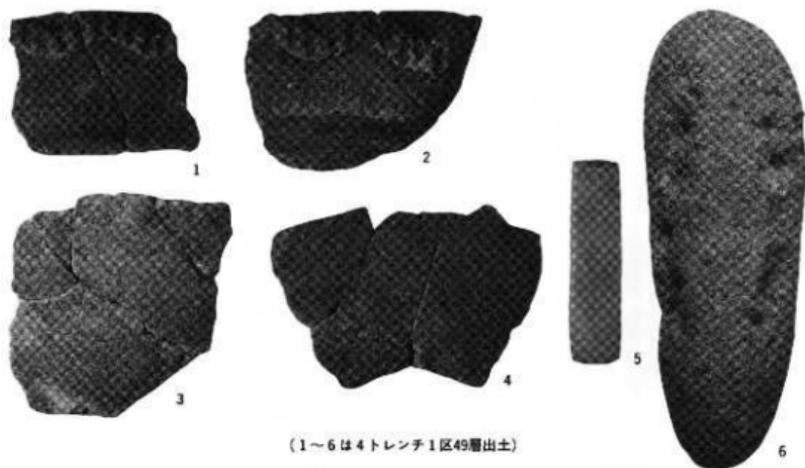


2
Cトレンチ5
区全景
(東から)



3
Cトレンチ6
区全景
(東から)





南陽市埋蔵文化財調査報告書第3集

山形県南陽市 稲荷森古墳

—史跡整備に係る昭和62年度発掘調査概報—

昭和63年3月31日 発行

発行 南陽市教育委員会

〒999-22 山形県南陽市三間通 436-1

T E L 0238 (0) 3 2 1 1

印刷 サンワ印刷株式会社

南陽市赤湯 346-22